1
平成5年（1993年） 1月10日 教皇様の声 （昭和59年10月1日第三種郵便物認可）
JANUARY,1993 毎月10日発行 第153号

# 教皇様の声

# 両親と代父母の役割

## 幼児洗礼式で

「すべての人間の救いのもととして神の恩寵は現れた」（ティト、2・11）

再び私たちは、喜びにあふれて神の恩寵の「訪れ」を迎え、（…）託身（受肉）の秘義を祝います。キリストの洗礼の祝日に当り、教会は私たちにヨルダン川の岸辺で御父が「贖いのわざによって人類の罪を身に負う」御子を人々の前にお示しになった瞬間を示し、典礼において再現してくれます。こうして、全ての人を救う神の恩寵が再び世に現れるのです。

今日、同じ恩寵が洗礼を受けるこの子供たちの上に注がれ、秘跡の力によって子供たちをイエズス・キリストの生きた肢体にし、教会の一員とし、神の子供として、信仰の賜で豊かにしてくれます。

ご両親の皆さんにもご挨拶いたします。子供たちが神の恩寵による新しい生命に生まれかわった今日の喜びを共にしたいと思います。また代父母の方々にも、ご両親と共に、洗礼を受けたこの子たちの信仰の旅路に付き添っていてくださるよう、お願いします。子供たちの成長の過程で、助言や愛情深い世話をもって、キリストのもたらした真理の宝に目を開き、真理の要求に行いで応えることができるよう、手助けする必要があるからです。

福音書の中に、洗礼がもたらす恩寵の賜について語る部分があります。「イエズスが祈られると、…聖霊は鳩のような形をとってその上に下り、『あなたは私の愛する子である』と言う声が天から聞こえた。」（ルカ3・21～22）

今日、洗礼の力によって、父なる神はこの子供たちをご自分の子であると仰せになります。実に、神の生命はこの子たちにも伝えられ、こうして「神の子と称されるほど、御父から計りがたい愛を受けた。私たちは神の子である」（Ⅰヨハネ3・1）ことが、この子供たちにおいても実現します。

私たちは揃って、洗礼と同時に神の生命に与ることによってもたらされた至高の美が、子供たちの生涯中つねに守られ、養われるよう、願っています。

ご両親と代父母の皆さん、教会が切に勧めるように、子供たちの信仰面での教育者となってください。

子供たちは皆さんからキリストを愛することを学び、皆さんの模範を見て希望を新たにすることでしょう。信仰の火を燃やし続けてください。その火は今日、燃えろうそくという形を取って子供たちに与えられました。こうして、人生にどんな試練があろうとも福音の知恵に従って行動し、主のまことの弟子として父なる神の栄光を賛えることができるでしょう。

（九一・一・十二、四十二名の幼児洗礼式で）

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済
© 1993
発行所
財団法人■精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
TEL.0797-31-3452・FAX.0797-31-3448

# 聖母マリア

## 私たちの祈りをお受けください

「聖なる御母、御身の御子は永遠に天地の王。」（神の母マリアの祭日、入祭唱）

思い起せば一九八四年三月二十五日、聖なる御母はここ聖ペトロ大聖堂へおいでになり、私たちは聖母の無原罪の御心に、世界と全ての民族からなる大きな人類家族をお捧げすることができました。

今日、大勢の兄弟姉妹と共に、みもとに近づき、歓呼の声を上げます。聖なる御母、消えない希望の光！ トトゥス・トゥウス、すべてあなたのものです。天の御母、慈しみ深い愛をもって、人々を自由の道へと向かわせてくださり、ありがとうございます。全てを神に頼り、全心全霊をあげて主に向かい、御子のそばで「人間と宇宙の自由と解放の、最も完全な姿」（教理省『キリスト者の自由と解放に関する指針』97番）として御身を賛えます。

兄弟姉妹の皆さん、時の力に押されつつこれから旅をするに当り、行くべき方向と神への感覚を確かめ、私たちの巡礼の歩みがよろめいたり迷ったりしないように、また私たちがイエズス・キリストのみを担うことができるようにいたしましょう。しばし立ち止って熟考し、心を改め、新たな者とならねばなりません。ファチマのメッセージと祝福は、神への立ち返りを表しています。ファチマの地で、私たちは自らが、今もいつも「昔のへび」の頭を踏み潰すあの処女の取り次ぎと助けによってもたらされた、人類の贖いの証人であることを感じます。

ここで言及したいのは、多くの男女が困難な状況の中で、時には迫害や苦しみの中で神への忠実を保ち、「信頼をもって主から救いを希望し、それを受ける、主において謙虚な貧しい人々の中で、特にひいでた」（『教会憲章』55番）処女マリアに心と目を向けつつ示した証です。実際、大きな困難に襲われた数知れない信者たちにとって、聖母は忠誠の卓越した保証であり、「エバのために人類に閉ざされていた天の門が、マリアによって再び全ての人に開かれ」（教会の祈り、聖母祝日の賛歌）て以来、救いの確証でした。

実に、「エバの不従順のもつれがマリアの従順によって解かれ、処女エバが不信仰によって縛ったものを、処女マリアが信仰によって解いた。」（聖イレネオ『異端論駁』III,22,4） 神のみことばへの無条件の信仰は、いつでも喜んでお告げの場面でのあの言葉を

繰り返します。「私は主のはしためです。お言葉の通りになりますように。」（ルカ1・38）　こうしてみことばは人となり、私たちの間に住まわれました。処女マリアは、聖書にあるエンマヌエル「神は私たちとともに」（イザヤ7・14、マテオ1・21～23参照）と呼ばれる御子を生んだのです。

エンマヌエルの御母、祝された御胎内の御子イエズスをわれらに示したまえ！　「すべての人を照らすまことの光」（ヨハネ1・9）を胎内に宿したマリアは、生涯を通じてイエズスとの親密な一致を保ちました。「全ての人と同じように地上での生活において、家庭の世話と仕事に追われながら、いつも子と親しく結ばれ」（『信徒使徒職に関する教令』4番）贖い主の秘義と親しく結ばれていたのです。贖いのわざに協力するこの長い道のりで、「マリアの母性そのものも独特の変容を見ました。彼女の心は次第に、キリストの使命の対象となるすべての人々に対する愛に燃え上がりました。」（『救い主の母』39番）

十字架のもとで、御母は委託の言葉を聞きます。「これがあなたの子です。」　事実、神秘体のかしらであるキリストを生んだマリアは、この神秘体のメンバー全員の母でもなければなりません。「マリアは教会において、教会を通じて、全ての人々を一人ずつ包み込んでいます。」（同47番）教会はつねに自らをマリアに捧げてやみません。

皆さん、どうか最後までマリアに身を捧げてください。進んでマリアに依り頼めば頼むほど、マリアは私たちを「キリストの底知れない富」（エフェゾ3・8）へと近づけてくださいます。こうして聖母は、私たちが自らの尊厳をより完全に理解し、召命の意味を悟ることができるようお助けになります。キリストのみが「人間を人間自身に完全に示す」（『現代世界憲章』22番）からです。マリアの霊的母性によって、私たちは兄弟姉妹の長子である御子における息子・娘として受け入れられます。自分自身を超え、解き放たれて、一つの家族、「すべてにおいてすべて」（Ⅰコリント15・28）である最終目的、神御自身へと向かう真の人類共同体となるのです。

聖マリア、紀元三千年を迎えようとする御身の子供たちをお守りください。キリストを通して、一人の御父のもとに戻る道を見い出すことができますように。

（九一・三・十二）

教会シリーズ10

# キリストは婚姻を秘跡にされた

**1**　第二バチカン公会議によれば、教会は「司祭的共同体」であり、その「組織的に構成されている聖なる性格」は秘跡を通して実現します。中でも叙階と婚姻は特別な場所を占めています。

教会憲章は、叙階の秘跡に関して、「信者の中から選ばれて聖なる叙階を受ける者は、神のことばと恩恵をもって教会を牧するために、キリストの名において立てられるのである」と述べ、婚姻の秘跡に関して、「キリスト信者の夫婦は婚姻の秘跡によってキリストと教会の間における一致と実り多い愛の秘義を示し、それにあずかり（エフェゾ5・32参照）…聖となるよう互いに助け合う」と述べています。（11番）

**2**　（…）イエズスが行われた最初の奇跡はカナの婚宴でのことでした。イエズスが「その栄光を示された」（ヨハネ2・11）この奇跡には、記されている出来事をはるかに越える深い意味がありますが、私たちはそこに、夫婦愛と婚姻の制定に対する主の暖かい眼差しと同時に、人間の生活と社会の基盤をなす婚姻に救いをもたらそうとする主の意図も見ることができます。イエズスは新しい愛の象徴として、新しいぶどう酒をお与えになりました。カナのエピソードは愛が消える恐れのある時、婚姻も脅かされることを示しています。婚姻の秘跡では、イエズス・キリストご自身が神の愛の賜によって夫婦の愛を救い、強め、忠実を保つ力を与え、助けてくださるのです。また、この奇跡がイエズスの公生活の始めに行われたことは、婚姻が神の救いのご計画と教会の形成においていかに重要であるかを示しています。

マリアは進んで奇跡を願われましたが、それはキリスト信者の婚姻に関する神の計画において、マリアがその後どのような役割を果すかを予告するものでした。つまり愛情深く見守り、取りなし、避けがたい問題が生じても乗り越えることができるよう助けてくださるのです。

**3**　カナの奇跡を参考に、婚姻の秘跡について見ていくことにしましょう。キリスト信者の婚姻においては、夫婦が互いに秘跡の授与者となり、共通司祭職が驚くべき方法で行使されます。

公会議の教えによると、「配偶者が互いに自分を与え」るという人間行為は、秘跡の権威にまで高められます。秘跡は男性と女性の自由な承諾の値打ちを示しています。この自由な承諾は、自己の人格と互いの愛の表明なのです。

**4**　公会議は次のことも教えています。キリスト信者の夫婦は、秘跡を通して「キリストと教会の間における一致と実り多い愛の秘義を示し、それにあずかります。（エフェゾ5・32）」（『教会憲章』11番）「真正な夫婦愛は神の愛の中に取り上げられ、キリストの贖いの力と教会の救いの働きによって導かれ豊かにされる。こうして夫婦は効果的に神のもとに導かれ、父母としての崇高な務めを果すために、助けられ強められる。この理由から、キリスト者である夫婦は、その身分上の義務と尊厳のため、特別な秘跡によって強められ、いわば聖別される。」（『現代世界憲章』48番）

夫婦は、「特別な秘跡によって、いわば聖別される」と述べる憲章の主張はとても重要です。洗礼と堅信の秘跡にあずかった二人がどのようにして司祭職を行使するかを明白に述べているからです。

**5**　教会の共通司祭職にこのように特別な仕方で参与することによって、夫婦は聖性に達することができます。実際、秘跡を通して夫婦の務めと家族の務めを果し、相互の聖性を深める力を受けるのです。夫婦は、「結婚生活および子女の出産と養育を通して聖となるよう互いに助け合い、結婚生活という身分と秩序において、神の民の中で自分たちに固有のたまものを持っている。（Ⅰコリント7・7）」（『教会憲章』11番）

**6**　婚姻の秘跡は豊かな実りを目指しています。それは人間に本来備わっている傾向です。「婚姻制度そのものと夫婦愛とは、その本来の性質から、子供の出産

※「聖性を目指して」……福者ホセマリア・エスクリバーの説教集より。60分カセットテープ1巻。定価二二〇〇円　〒三〇〇円
お問い合わせ、お申し込みは精道教育促進協会まで。

# 説教・講話・書簡等の抄訳

※　列聖請願者より配付を依頼されている福者ホセマリア・エスクリバーの「ニュースレター」24ページカラー版特別号が発行されます。ご希望の方は、送付手数料二五〇円を添えて、精道教育促進協会までお申し込みください。

と教育とに向けて定められているものであって、これらはその栄冠のようなものである。」（『現代世界憲章』48番）　秘跡を通して、出産と子供の養育の義務を果すための信仰と愛と寛大さという霊的な力が与えられます。秘跡は神の恩寵の源であり、それによって本来の正しい傾きを固め、完成させ、夫婦の心理そのものを際立たせます。夫婦は「創造主なる神の愛の協力者」（50番）としての自らの務めを知ったからです。

神の創造の御業と、創造をもたらす愛に協力していることを知れば、出産と出産の愛の聖なる性格をさらによく理解し、生命を伝達する方向へと愛を向かわせるための力を得ることができるでしょう。

**7**　公会議は教育に関する夫婦の使命についても注意をしています。「父および母としての役目と品位を与えられた夫婦は、父母の第一の務めである教育の任務、特に宗教教育の任務を熱心に果さなければならない」（48番）この勧めを理解するために光となるのが教会憲章の言葉です。「このいわば家庭教会において、両親は言葉と模範をもって子供たちのために信仰の最初の使者となる。」（『教会憲章』11番）このように公会議は司祭的・秘跡的共同体である教会の一員としての夫婦・両親の使命を教会の使命との関連において理解するよう勧めています。

信者にとってキリスト教教育は、両親が子供に与えることのできる最高の贈り物であり、崇高で真実な愛のしるしです。そのためには誠実で不変の信仰を持ち、信仰にそって生きなければなりません。

**8**　夫婦の一致は、「二人の人間が互いに与え合うことであって、子供という善と同様に、夫婦間の完全な忠実を要求し、また夫婦間の一致が不解消であることを求める」と現代世界憲章48番は述べています。忠実と一致は、秘跡を通して与えられる「恩寵と愛の特別な賜」（49番）から生れます。それは教会を愛されたキリストにならって、「夫婦も献身的に変ることのない忠実をもって互いに愛する」（48番）ための力を与えます。これも秘跡が与える恩寵によるものです。

**9**　公会議は次のように述べています。「キリストと教会の間の愛の誓約の像であり、それへの参加である婚姻から生じたキリスト教的家庭は、夫婦の愛と豊かな実りと一致と忠実によって、また家族全員の愛の協力によって、世における救い主の生きた現存と教会の真正の本質をすべての人に示すであろう。」（48番）

こうして、キリストの愛によって造られ、キリストの愛に生きる聖なる共同体である教会が、その本質から生じる財産として所有している生命と愛と一致を証しするために、個々のキリスト信者だけでなく、信者の両親と子供から成る家庭全体が召されているのです。

（五・六）

## マリアを黙想すればキリストがわかる（3）

**1**　（…）「事実」に隠された意味を探り出す仕事は、神学者の前に開かれた広大で実り多く、魅力的な分野です。神学者が厳密な方法で、規準となる言葉や普遍の聖伝、教導職の指示に従い、典礼上の経験に注意を払いつつ、キリストの御宿りと誕生という救いの出来事とマリアの永遠の処女性を究明するなら、聖書全体と出会うことになるでしょう。神が「まだ誰も手をつけたことのない大地」（創世の書2・4～7参照）から人間をお造りになったこと、古い契約について、救い主が現れるという預言、ダビドになされた約束について語る聖書の言葉、またアブラハムの業績を語る記述が、託身の契約の中から際立った響きを伴って聞こえてきます。

太祖の従順な信仰は、マリアの「なれかし」に集約されてよみがえりました。また、うまずめの婦人たち、サラ、マノアの妻、ハンナ、エリザベトらが、神のお恵みによって子供を得たすばらしい母性愛の物語も。そして、「上から」「水と霊によって」（ヨハネ3・3～8）生れるという弟子たちの誕生についてのくだりにも出会います。これらは聖霊によってマリアから生れたイエズスの誕生のかたどりです。マリアの過越の母性は、御子が童貞である弟子に処女である御母を託された場面（ヨハネ19・25～27）に示されていると教父たちは考えています。（聖イエロニモ、聖ソフロニオの著書参照）

新約・旧約両聖書を通じて、真実で忠実な配偶者となり、子を生む女の苦しみの叫びも死を嘆く声ももはや聞こえない終末論的共同体となることを熱く望むイスラエルの、切なる願いが見られます。これらはかたどりであって、多くの表現が示すものに注意を向けつつ深く研究すれば、テオトコス（神の母）あるいはヴィルゴ・マテルという呼び名が救いの経綸の要約とさえ言えそうです。

**聖母マリアの永遠の処女性を主張したカプア公会議の開催一六〇〇年を記念する国際学会の席上で、教皇様が神学者たちにされたお話の一部です。聖母の処女性を賛えつつ、神学者の果すべき役割についてお話しになります。**

### 完全で、正しい方法で

**2**　さらに神学者にとって必要なのは、マリアの処女性という問題を完全な、正しい方法で提示することです。

教理の十全性から考えれば、聖マリアの心の処女性が強調されなければなりません。体の処女性が、その象徴する価値ゆえに重要であるのなら、イエズスの御母の心の処女性はそれ以上に重要です。処女の状態で、マリアは新しいエバ、真のシオンの娘、完全な弟子、教会の完璧な似姿です。ですから、マリアは神のご計画への忠実を全うすることを第一とし、妥協したり偽りや高慢で汚されることもありませんでした。契約の忠実な履行に対し、イスラエルの側の契約違反を預言者たちは姦通に例えています。福音のメッセージを心から受け入れ、一途にそれを守る人は幸いであると言われ（マテオ5・8参照）、天の王国のために純潔を守る人は褒め賛えられます。（同19・12参照）キリストの秘義・最高の真理（ヨハネ14・6参照）とその教えを正しく理解する教会は、託された信仰の財産を完全で無傷の状態に守っているので、処女と呼ばれています。

教会はつねに教えてきました。肉体の純潔を保っても、心の中に偽りや高慢が巣食っていたり、愛を欠いているなら無価値であると。

**3**　教理を正しく説くためには偏った立場や誇張や歪曲を

# 不変の教え

避けねばなりません。たとえばマリアの処女性について述べる場合、いかなる形でも、直接にであれ、間接にであれ、結婚の価値と尊厳をおとしめるようなことがあってはなりません。結婚は神が望まれ、祝福されたもの、キリスト者をキリストにかたどらせる秘跡であり、完徳と聖性への道なのです。マリアの処女性が持つ比類ない独特の性格をよく考えず、マリア独自の状況を人生の他の状態に当てはめることはできません。また、マリアの処女性を修道者や司祭の召命（独身制）にのみ当てはめて考えたり、処女性が何よりもキリストの秘義と教会の秘義に関わっていることを忘れ、その教えをキリスト教のさほど大切でない点と見なすことはできないのです。

### 現代文化と歩調を合せて

**4** 最後に、神学者はマリアの処女性という秘義を説明する時、同時代の文化の傾向や志向を考慮する必要があります。

確かに、現代文化の傾向はキリスト教的な処女性の価値を理解できる状態にあるとは言えませんが、それでも神学者はひるむべきではありません。聖パウロの時代の文化は十字架の秘義をたやすく受け入れる状況ではありませんでしたが、キリストへの忠誠ゆえに、パウロは十字架を自分の宣教の基礎としたのです。（Ⅰコリント2・2、ガラツィア3・1、6・14参照）

神学者は、たとえ無視されようと否定されようと、福音の真価は今日の男女にとってもなお価値を失っていないということを堅く信じなければなりません。

処女性は賜であり恩寵です。それは教会への祝福であり、同時に、肉体においてはそうでなくても、心では処女性を保つよう召された大部分の人々全てに分かつべき祝福です。

処女性の理由を示すのは神学者の責任です。現代の男女が、処女性の価値を再発見できるよう手助けするのです。そのためには、福音の価値を伝えるのに最もふさわしい言葉を選び、多くの場合、処女性が内的自由と他者への敬意を表すものであること、聖霊の示す価値への関心、はかないこの世を超える視野を持つ力（マテオ22・30参照）、根本的に神の国のため仕えつつ生きるしるしであることを示さなければなりません。

人間の創造を特徴づける処女性（創世2・4～7、22・23参照）と、キリストにおける人間の再創造は、被造界を歪めるさまざまな形の暴力、自然破壊や環境汚染に反対する現代の環境運動に、何らかのインスピレーションを与えるのではないでしょうか。

何はさておき、神学者は現代の人々に、新しい完全な人間の理想はキリスト・イエズスにおいて達成されていること、キリストが真の人であること（ヨハネ19・5参照）を示さなければなりません。キリストにおいて、神の人類に対する計画は究極の完成を見ます。さて、キリストの生い立ち、すなわちマリアへの御宿りと、新しい墓から永遠の命への誕生の根源には、キリスト自身と、弟子たちへの模範としての生き方に関わる「処女性の要素」があります。

**5** 三九二年のカプア教会会議に参加した司教たちが浅薄な人々ではなかったことは確かです。彼らは、マリアの永遠の処女性が、第二義的なものでも、主のはしための謙虚な人柄を示すにとどまるものでもないこと、むしろ信仰の根本的な局面すなわちキリストの秘義そのもの、その救いのみわざと御国への奉仕に関わるものであることを理解していました。

彼らの証言は、私たちの手本となります。願わくは、今日神の秘義を黙想する人が皆、自らの経験から光を引き出すことができますように。この学会にご出席の方々全員に祝福を送ります。

（一九九二・五）

## 科学と宗教と文化

（…）科学の各分野での特殊専門化と、各方面への技術の応用によって知識は細分され、人間を一つのまとまった存在として見ること、諸機能がうまく合わさった複合体として理解することを、時には不可能にしています。実際、科学と文化がどんどん離れていって、ついにはお互いを無視するに至るかのように考えてしまう危険があります。しかし、科学も文化も、人間人格に奉仕するために必要不可欠なものです。

（…）科学の分野で働く皆さんは、心の奥で、人間は自分自身を否定しない限り、一番決定的な問いかけから逃げることができない、と感じておられます。それはまさしく科学が、別の次元に属するものとして枠外に置いている問いかけです。他の分野に属する知識なのです。

科学の進歩は、特に遺伝学の分野においては、事態を注意深く見守り、その善悪について考えていかなければなりません。

こうした進歩は、道徳上中立の立場で考えても差しつかえない、技術的な面に限ったことではありません。それは直接に、人間の人格に、人間の最も大切なもの、人格を形作っているものに関わってくるからです。たとえ価値判断が異なろうと、政治上の見解が夜と昼ほど違おうと、多くの国で、政治責任者たちは国家的な倫理委員会を設けています。各国の委員会でもそれぞれ見解の違いはありますが、最近になってそれらの機関が設けられたというただ一つの事実が明らかに示すのは、基本的な道徳上の確信についての合意が欠けていたという悲劇に加え、当面の事態が複雑かつ深刻になっていることに当局者たちが気づいたということです。

皆さんには、専門とする知識や技能を用いて、いま必要な道徳上の覚醒に役立たせる責任があります。進歩する科学技術の分野で、倫理という局面を重視することによって科学の進歩を真に人間的なものとし、人間の住みやすい社会を築くことに貢献できるでしょう。倫理に関する配慮は、研究者の仕事がいかなる点でも科学的な厳密さを損なわれぬようにするのみならず、それどころか科学の研究にそれまで見過ごされていた人間的な重要性を気づかせてくれます。こうした倫理的反省がなければ、人類全体、さらに地球自体が危険にさらされるでしょう。科学研究、また文化事業に従事する皆さん、世界は皆さんを、皆さんの証言と個人的な助けを必要としています。倫理道徳が科学技術を啓発し、全てを越える人格と精神の重要さが尊重され、科学と文化が「人間的である」と言うにふさわしいものとなるために。（九一・十・四、教皇庁科学アカデミーと文化評議会主催のシンポジウムで。）

「教皇様の声」　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説
なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月十日発行　■定価　一部八十円
送料実費　■一年予約九百円　送料六百円　■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替
神戸
3-72393